

思いを「伝える」ことの意味を考える授業実践

—Unit4 To Our Future Generations と Kevin Carter—

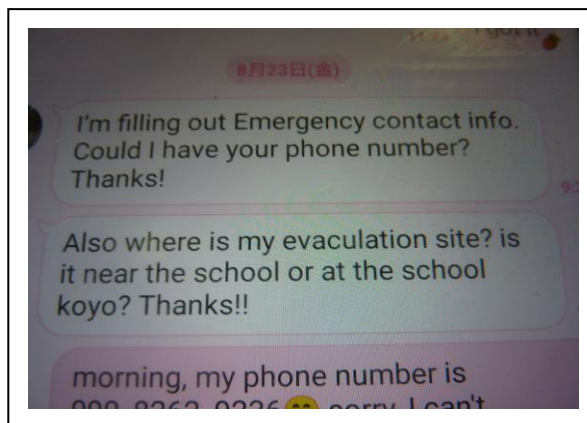
高嶋 和代

今年度の英語科の目指す姿は「英語という言葉のツールを用いて、協働して自分達の思いや考えを発信したり、情報や他者の意見を理解したりしようとする生徒」である。本単元は避難訓練に始まり、東日本大震災後に中澤氏が災害による流木からバイオリンを製作し、それが各地で演奏されているという内容に終わる。昭和には戦争があった。その歴史のひとつを私達はLet's Read 1のA Mother's Lullabyで英語を通して学ぶ。そして、平成、令和と毎年のように我々は未曾有の天災に見舞われている。本単元では、そういった災害の中、我々はどう生きるべきかを、災害に見舞われた人達の生き方から生徒達に探り出し、考えを深めさせ、その学びを「伝える」ため英語をToolとして使い、アメリカ人であるALTに英語で伝えようという設定で単元構成を行った。この単元での学びを通して、確かに生徒一人一人に「伝えたい」思いが生まれ、どうしたら正しく相手に伝えることができるか考える中で、生徒の英語を学ぶという姿勢に変化が見られたように思う。

1. 学びの実際

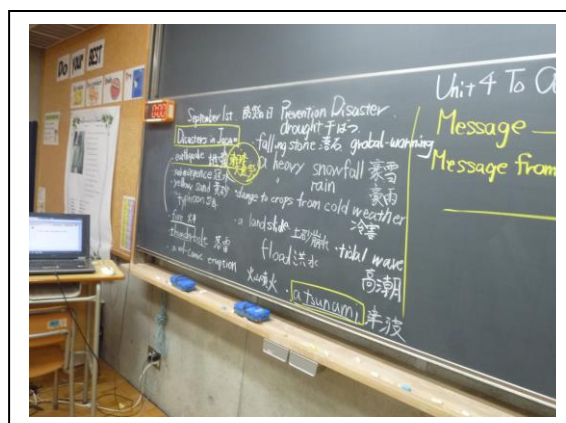
(1) 近年の天災について考える (第1時)

Unit4のStarting Outはお避難訓練Evacuation Drillから始まる。奇しくも授業前日は9月1日「防災の日」であった。また、これも全くの偶然であったが、新規のALT(Ms. Bernadette)が本校に着任し、夏休み中に次のようなメールを送ってきていた



[資料 ALTが避難場所を尋ねてきたメール文]

ため(資料)、生徒達はメールを見て、来日している外国人がまずどんな情報を必要としているかを身近に考えることができた。そこで、「日本での災害についてBernadette先生(後BB Sensei)に伝えてあげなければ」という声が上がリ、近年の日本での災害をどう英語で表現したらよいか、意欲的に辞書を用いて調べ、黒板に我先にと記入し始めた。意見が出し尽くされたところで、それぞれの災害について、過去に自分自身が経験した思い出(2年前



[近年起こった災害について英語で板書]

の福井豪雪など)を全体で語り合い、あらためて近年日本での天災の多さを再確認し、驚いていたようだった。その後、教科書内容の避難訓練の方法を英語でどう表現するかを学び、BB Senseiが来られる水曜日にどんなことを伝えるか整理した。また、授業の最後に「本単元では、前半では災害への備え、後半では東日本大震災後の出来事について学びます。Let's Read 1のA Mother's Lullabyもそうだったけど、東日本大震災は日本で起こった出来事なのに、なぜ日本で起こったことを英語に訳し、その英語を日本人の私達が学ぶのか最後に皆さんに考えてもらおうと思います。」と提起した。何人かの生徒は前単元Let's Read 1 A Mother's Lullabyでの振り返りを想起し、本単元での学びへの見通しをもったようであった。

(2)教材を読みとく (第2時～4時)

生徒達は言語材料として、it's (形容詞) for(人)to 不定詞の形を通して、Dialogの本文内容を学んだ。本文中の I think it's important to keep **the past** in mind. 「私は**過去**を心にとどめておくことが大切だと思う。」のくぐりかたが次なる Read and Think のバイオリン製作者中澤氏の story へと続いていく。ここでは東日本大震災については直接ふれていない。生徒達はコラムの欄の中澤氏へのインタビューの回答や、本文中の The audience listened **closely** to the sound of the violin. Some of the people **were in tears**.

「聴衆はバイオリンの音色にじっと耳を傾けました。中には涙していた人もいました。」の文章から、このバイオリンの音色が持つ意味を推し量るだけである。

教師：演奏を聴きに來ていた人達にはどんな音色だったんだろうね。涙していたのはなぜだろう。

教師の問いかけに対し様々な答えが返ってくる。

生徒A：きつと心が締めつけられるような音色。

生徒B：失った家族の思い出がよみがえってきた。

教師：中澤氏はバイオリン製作者として、東日本大震災後、自分に何ができるかを考えて行動したんだね。
「被災した人々の記憶を知る木に語りかけ、木の思い出を聞いて、対話をしながらバイオリンを作りあげた。」って、インタビューの回答にあるけど…

生徒A：木の思い出が音色になってみんなに聞こえたんで？

生徒Aの詩的な発言にうなづく生徒と、照れ笑いする生徒A

教師：「思い出」というと、最後に中澤さんが

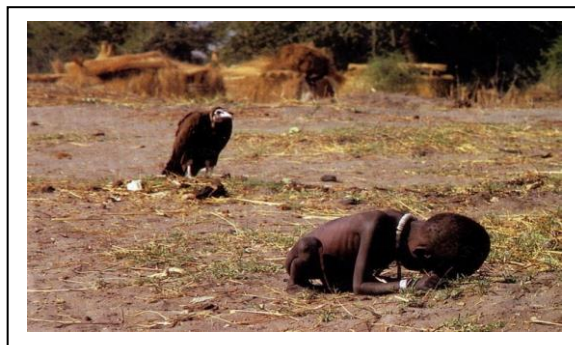
“I want them to pass on **the memories**.”

「私は彼らにその記憶を伝えてほしい」って言うけどこの **the memories** ってどんなことだと思う？ 自分達でテーマを決めてまとめてみんなでシェアして、BB先生にも伝えよう。

と、教師が提起し、次時は一人一人がテーマを決め、伝えるべき情報の収集活動に入った。

(3)Kevin Carter “A Vulture and A Child” (第5時)

教科書 Read and Think 2 では言語材料として、生徒は want(人) to 不定詞の形を学ぶ。毎年ALTとの Team Teaching の授業では写真家 Kevin Carter の本題材を取り上げ、生徒に彼の生き方について考えさせている。



[A Vulture and A Child ハゲワシと少女]

死にかけている少女と少女の死を待つハゲワシの写真をとって、ピューリッツァー賞を受賞した彼の行動は？

BB先生：Are you for or against his action?

教師：Please move. For side, sit here. Against side, sit over there.

なんと、予想に反して20人中、19人がFor side側に立ち、Against sideに立ったのは、男子生徒一人。最初にFor sideに立った生徒がALTになぜKevinがとった行動に賛成なのかの理由を挙手して英語で述べる。

生徒A：I'm for him because his photo saved many starving Sudanese.

同意見の生徒がMe, too.と言ってバラバラと着席していく。

BB先生：Other?

生徒B：His photo focused the world's attention on the Sudan. That was his job.

数名の生徒がまた着席していく。

生徒C：If Kevin helped this child, she will die soon. And many, many starving people weren't helped. So, I think his action was right.

数名の生徒がまた着席していく。

生徒D : The world could know the facts of

Sudan by Kevin's photo. などなど

生徒達は教材の英文を取り入れながらも、なんとかALTに自分の考えを伝えようとしていた。中にはうまく伝えられないもどかしさからかジェスチャー混じりで訴えている女子生徒もいた。



[ジェスチャー混じりで必死にBB sensei に伝える生徒]

次にALTはたった一人Against sideに立った生徒に尋ねた。

BB先生 : Why are you against?

生徒E : I think life is very very important, Kevin had to save the child before everything.

BB先生 : I see.

教師 : BB sensei, I'm against Kevin's action.

たった一人のAgainst sideの生徒側にJTEが立って、For sideの生徒達に尋ねた。

教師 : If this child was your sister or your best friend, can you support Kevin? Can you say "Oh, Kevin, you did a great job. Many starving Sudanese were helped, but my sister died." ? I can't say so.

生徒達が困惑の表情を見せる。たった一人Against sideに立った男子生徒は嬉しそうな表情をのぞかせる。

しばし沈黙の後、ALTがその後のKevinについて涙ながらに語り始めた。(毎年私はこの教材を扱い、ALTに語ってもらっているが、授業中に涙を流すALTを初めて見た。ALTはあまりにも壮絶なKevinの生き様を今回初めて知り、自分の経験上この様な内容は高校以上でしか扱わないため感情を抑えきれなかったようだ。)



[Kevin Carter の生き様について語るBB sensei]

ALTの話聞いた後、生徒達は授業での振り返りを書き始めたが、時間が不足し宿題とした。思いを伝えるのが難しければ日本語混じりでもいいよと伝えたが、数人を除きほぼ全員がALTに伝えようと英語で感想を書いてきたのには驚いた。

(4)メッセージを伝える (第6時~9時)

生徒はUnit4最後の英文 Mr. Nakazawa said, "I want them to pass on **the memories.**" の **the memories** とは何か、東日本大震災にまつわる様々な出来事に関して情報収集を行い、その中から自分が最も何をALTに**伝えたい**のかパソコンに向かいながら必死にテーマを考えていた。災害の概要から、災害時自らの命を賭して町の人達を救おうと懸命に努力した人の有り様、災害後ボランティアに駆けつけた人達、世界に広がるボランティアの輪。ドラマは数限りなくあり、そこから一つを選び出すのには時間がかかった。生徒達は休み時間からメディアセンターに集まり、パソコンを立ち上げ、一心不乱に考えていた。そして、ようやくテーマが決まるとALTに伝えるため英語で必死に表現しようとしていた。中には調べた日本語をパソコンの英訳機能で英語にしようとしていた生徒もいたが、時には奇妙な英語になってしまい、伝えたいことがうまく伝わらないこともあることに注意を促した。ここで、私は歩君という男子生徒に注目した。彼はどちらかと言えば英語が得意でなく、長文に向き合うと目が閉じてしまう。授業中も発言は少なめで、思いはあっても言葉にするのが難しい。何事にもじっくり取り組むが時間がかかる生徒である。ところが、6月頃から英語の授業に於いて彼の様子に少しずつ変容が

見られる様になってきた。そして、夏休み前に学習した前単元 A Mother's Lullaby での最終発問「なぜ広島原爆の物語を英語になおしたものを日本人の私達が学ぶのだろうか？」という問いにこう答えていた。

歩：他国の人に伝えるため

原爆を被爆したのは世界で日本しかなく、世界的なことだからです。原爆の物語を英訳することにより、世界のより多くの人に原爆の恐ろしさを知ってもらい、このような悲劇がもう絶対に起こらないようにするために英語で学ぶのだと思います。そして、戦争を知らない僕達も原爆について学ぶために、英語になおしたこの物語を学ぶのだと思います。

おそらく彼にとっての英語とは、よくわからない外国の言葉という認識だったと思われたが、相手に伝えるための tool なんだと思えたのではないだろうか。それでは、その苦手な英語で東日本大震災の何を彼は ALT に伝えたいと思うのか、彼の学びのあとをおって見た。

本単元の6時間目、歩君は何について伝えようかパソコンに向かいながら考えていた。

結局50分は瞬間に過ぎ、授業の終わり頃になって、ようやくテーマが決まった様だった。彼は懸命に情報をノートに書き取ろうとして、最後の最後までパソコンに向かっていたが、まとめ終わることはできなかった。

10月4日の放課後、英語検定を受けない生徒は下校していたが、彼は自主的に残り、一人メディアセンターのパソコンに向かっていた。



〔放課後一心不乱にパソコンに向かう歩君〕

正直歩君は宿題を忘れることも何度もあり、こんなに意欲的な姿を見たのは初めてだった。この時、確かに歩君の中には ALT に伝えたい何かが生まれていたのである。

本単元7時間目。前もって、生徒各自がどんなテーマ設定をしていたのかを聞き、カテゴリ化していたので、同じようなテーマの生徒でグループを編成し、互いの発表を聞き合い、わかりにくい表現や付け加えた方がよいポイントなどをアドバイスし合った。教師は生徒達の活動を見守りながら、各グループの状況を見て、表現の工夫や正しい発音の仕方など支援した。このグループワークの中で歩君は「国内外のボランティア」のテーマについての話し合いに参加していた。自分の発表以外に発言することはほとんどなかったが、同じ人物について他の生徒が発表すると、赤字で自分のノートに書き加えていた姿が印象的だった。

そして本単元8時間目は、テーマの異なる生徒達でグループを編成し、自分達が考える **the memories** の内容をグループ内でシェアして各自感想をワークシートに書く活動に入った。

海君が司会を務め、碧さんが東日本大震災の際の海外からの支援について語る。

碧：海外からの支援のおかげで、私達日本人は幸せに暮らせていることに感謝してほしい。世界のリーダーとして恩返しをしてほしい。

海：恩返して何？

碧：支援とか

続いて桃さんが気仙沼階上小学校での出来事について語る。

桃：中澤さんは避難場所を調べておいた方がいいって伝えなかったんじゃないかな。

碧：でも、決められた避難場所が安全かどうかはわからないよ。

桃：ま、その時は臨機応変に判断して動くしかない。丘とか高いところとか。

海：他に質問とかない？…じゃ、次僕ね。

海君が被害状況について語る。

海：死者1万3千人、行方不明者5千人やぞ？ま、未だに行方不明ってのもありえんから死者1万8千人ってこと

で、安居地区の人口が3千人らしいから安居地区の6倍がいっぺんに死んだんやぞ？やばくね？

桃：すごいな。

海：さっき碧さんが海外からの支援について話してただけどアルジェリアからも支援あったんやって。

桃：アルジェリアってどこ？

碧：アフリカ。

桃：なんでアフリカから支援？

海：なんか親交があったんで？

桃：ふん。

海君が当時の震災の報道を保育園の時テレビで見たという話から当時の様子を語る3人。歩君は終始3人の話にじっと耳を傾けるだけで、自分から一切発言しない。まるで、3人が話すのを聞きながら、早く自分の番が来ないか待ちきれないかのよう。

海：じゃ、次歩の番。

驚いたことに歩君が持っていたメモは英語で書かれたもののみ。震災の際の国内外のボランティア活動について、自身が心打たれた話題の英文を3人に日本語で訳して語っているのだ。

桃：すごいな。

海：アメリカの「友達作戦」って？

歩：アメリカの軍が物資の調達をしたり、がれきをどかしたりしてくれたい。

碧：やくざが解散までしてボランティアに参加したっていうのもすごいな。

歩君は自分の思いを出し切り、発表を聞いたメンバー達が次々と質問や感想を口にしてくれたことで、自分が伝えなかったことに関心をもってくれた事に対し満足げな表情を見せた。

グループでのシェアリングが終わり、教師の問い。

教師：みんなが考える the memories にはいろんなものがあることに気づけたと思うけど、最初の先生の質問に戻るね。じゃ、日本で起こった東日本大震災の話をなぜ私達が英語で学ぶの？班で考えてみて。

各グループでの話し合いが始まり、リーダーが班員の意見をまとめ、ホワイトボードに書き留める。

桃：やっぱり英語で東日本大震災について世界に伝えるため？

碧：うちもそう思う。

海：英語に直す理由はそれだと思うけど、なんでそれを俺らが勉強するかってこと。

沈黙

海：英語で学んだ方がより心に残るからかな。

歩君うなづく。

時間になり、教師が各グループの意見をまとめる。

話が深く感じられるから。

印象づけるため。

英語でどう伝えられるか学ぶため など
教師が「伝える pass on」ためであるとまとめ、次時に BB Sensei に自分達の学びを英語で伝えてもらうという最終課題を確認し、授業は終わった。

本単元9時間目。ALT との Team Teaching の水曜日に、生徒が同じテーマのものはグループ発表、独自のテーマのものは一人で BB Sensei に英語で語った。未習の単語もあったため、部分的には発音がたどたどしいものもあったが、どの生徒も BB Sensei の目を見てプレゼンすることができ、BB Sensei が疑問点をその場で尋ねたり、プレゼンの評価を行っていた。



【 BB sensei にプレゼンする歩君 】

歩君は reading も練習してきたのだろうか。40語ほどの英文をきれいで流ちょうな発音で BB Sensei にプレゼンし、高い評価を得た。

単元の最後に生徒に「英語という教科での学びとは？」と問うたところ、歩君は答えた。

基礎的な Reading, Writing, Listening, Speaking だけ

でなく、そこから…約70億人もいるこの世界に住む人達とこれからコミュニケーションがとれるようになったりすること。

歩君にとって、この単元での学びは確かに実感としてとらえられたのではないかと思う。

2. 振り返り

本実践録は、前回のテーマ「戦争教材を読みとくことの意味を考える授業実践 ―広島原爆投下とLet's Read 1 A Mother's Lullaby-」に続く実践として、前回は「読みとく」→理解に焦点をあてた。今回は「伝える」→表現・発信に焦点をあてた実践とし、2単元にわたって、英語科の目指す姿「英語という言葉のツールを用いて、協働して自分達の思いや考えを発信したり、情報や他者の意見を理解したりしようとする生徒」の育成を目指した実践である。歩君の学びのあとにあるように、授業を通して生徒の心の中に「なぜ英語を勉強するのか」の問いに対する答えを生徒自身が自ら捉えられたとしたら、今回の実践はある意味目的を達成できたのかもしれない。しかし、教師側の勉強不足から、あくまでも教師側の意図が強すぎて、生徒が真に協働して学ぶ場となっていたかが課題として残った。顕著に見て取れるのが、7時間目の授業である。教師が生徒の言葉を十分拾って返すことができず（正直時間の制限に対する焦りもあったが）、生徒の学びを置き去りにしてしまったことである。あの場面で、生徒達は確かに「伝える」ことを前提にしていたのに無視した形になり、あろう事か教師の思いを伝える場で締めくくってしまったことである。これでは、本校が目指す「生徒主体」の、教師と協働して創る授業とはほど遠い実践である。

この振り返りは、本授業を行った5ヶ月後に捉え直し記しているものである。歩君の学びを追って参観記録を中心にまとめたが、学級全体としてどのような学びが展開されて知が生み出された

(?)のか(そもそも知は生み出されたのか)、そして学びの過程を追った生徒が授業にどう影響を与えたのかまでの考察はない。

自身が生徒の思考を中心においた授業の実践と見取りを繰り返し、生徒の思考を深める授業づくりを今後あらためて勉強し直す必要性を考えさせられた。

【引用文献】NEW CROWN ENGLISH SERIES 3

LESSON 7 A Vulture and a Child 三省堂 2001

牧田 秀昭 Learning Compass No.30 2019.10.9

木村 優・岸野 麻衣 編 「授業研究」新曜社

2019.6.5